

The Impact of Nutrition and Oral Function Exercise on among Community-Dwelling Older People

谷, 明日香

<https://hdl.handle.net/2324/7182391>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (歯学) , 課程博士
バージョン :
権利関係 : © 2023 by the authors



氏 名	谷 明日香			
論 文 名	The Impact of Nutrition and Oral Function Exercise on among Community-Dwelling Older People (地域在住高齢者における栄養と口腔機能向上プログラムの効果)			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	和田 尚久
	副 査	九州大学	教授	竹下 徹
	副 査	九州大学	教授	築山 能大

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

口腔機能の低下は低栄養を引き起こし、また、低栄養は身体的フレイルや要介護リスクを増加させることが報告されている。よって、高齢者の口腔機能の低下を早期に発見し、適切に介入することが必要である。

本研究では、口腔機能の向上のために開発した体操（以下、本体操）の効果と、提供方法による違いについて検証することを目的とした。また、口腔機能に影響する食品摂取状況を調査した。2020年に実施した疫学調査の口腔機能検査において、最大舌圧が30kPa未満で同意が得られた26名（65～79歳）を研究対象者とした。本体操の提供方法は、タブレットを使用し動画で実施する群（タブレット群）と、前述の動画を写真にして紙冊子で実施する群（紙媒体群）の2群に分けた。介入期間は1か月間とし、介入期間中は週3回、口腔周囲筋を総合的に動かすことができる準備体操と、6種類の口腔機能向上トレーニングのうち2種類を1回のプログラムとして実施した。介入前後に口腔機能（最大舌圧、舌口唇運動機能：Oral Diadochokinesis（ODK）/pa/、/ta/、/ka/）、身体組成（BMI、体脂肪率、内臓脂肪レベル、皮下脂肪率、骨格筋率）の測定を行い、各群のそれぞれの項目の変化を統計学的に分析した。また、参加者の舌圧変化量を2群に分け、介入前後の栄養摂取食品量を比較した。

その結果、介入後、体重、BMIが増加し、咀嚼能力、最大舌圧および口唇と舌後方の巧緻性（ODK /pa/、/ka/）が向上した。また、2因子分散分析の結果、タブレット群においてはBMIと骨格筋指数が増加し、口唇の巧緻性（ODK /pa/）が向上し、紙媒体群では舌圧が向上した。さらに、舌圧変化量が多い群ではたんぱく質の摂取量が多かった。以上のことより、タブレットと紙冊子のいずれの媒体であってもプログラムの効果が認められた。また、効果的な口腔機能向上にたんぱく質摂取が影響する可能性があることが示された。

本研究は、高齢者の口腔機能の向上のために開発した体操の効果について詳細に検討され、新知見を加えるものである。今後の高齢者対象の口腔機能向上トレーニングプログラムの発展に寄与する内容であることから、博士（歯学）の学位授与に値すると認める。